2007 年度 修了

健常者の妄想的観念に関する研究
－微小妄想的観念と疎外妄想的観念との多次元比較 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
吉村　道孝

本研究では微小妄想的観念と疎外妄想的観念についてそれぞれ抑うつ気分、対人恐怖と関係性があるのかという点で研究を行った。従来、妄想とは常識的に考えて「了解不能」なものとして考えられていた。また妄想研究においては記述的研究が多く、実証的に妄想を研究したものは少なかった。しかし 1970 年代から妄想研究は活発に行われるようになった。そういった流れは主観に頼られていた妄想を批判し、科学的実証性に基づく研究を支持するようになった。その中で健常者では持つことがないとされていた妄想も認知的推論の仕方や情報処理、妄想の主題によって必ずしも臨床群だけで確認できるものではないことが分かり、健常者が持つ妄想と類似する観念は妄想的観念として整理されるようになった。

妄想的観念とは健常者で見られるものであり、「私の能力は劣っているのではないか」「誰かに迷惑をかけているのではないか」という事実とは異なる疑念または恐れを持つことである。そういった観念は臨床群で見られる妄想のように不適応感を伴う場合や容易に消去できない強固な考えとして妄想と類似点が多いことが明らかになってきた。しかし妄想的観念研究の歴史は浅く、それがどのような特徴を持つのかということはまだ解明されていない。そこで健常者の妄想的観念がどのような特徴を持つのかということを本研究の目的にした。

研究１では重篤な抑うつで体験されることが多いとされる微小妄想主題(微小妄想的観念)において健常者ではどのように体験されるのか、また微小妄想的観念と抑うつ気分ではどのような特徴を持つ関係にあるのかという点を検証した。

研究２では同じく対人恐怖症で体験されることが多いとされる疎外妄想主題（疎外妄想的観念）において健常者ではどのように体験されるのか、また対人恐怖心性とはどのような特徴を持つ関係にあるのかという点を検証した。それぞれ大学生 300 名余りを研究対象とした。

結果、研究１の微小妄想的観念と抑うつ気分に関しては複数の下位項目において相関関係が確認でき、微小妄想的観念が抑うつ気分と関係性があることが言えた。研究２の疎外妄想的観念と対人恐怖心性についてはわずかに相関関係が確認できた。これらの関係性を丁寧に読み取っていった結果、微小妄想的観念にはその観念を持つことに対する抵抗感や中断不能感を持つ一方、訂正可能感という矛盾した観念を持っていることが分かった。また疎外妄想的観念では他者の目を気にするあまり、緊張が高まり偏った思考になってしまう。またそういった偏った思考や状況に対する違和感を感じられなくなり対処可能感を感じられないという一連のパターンが形成されるという考察を得た。

今後は妄想的観念を臨床群でも多次元的に研究することが必要である。それは妄想と妄想的観念の特徴を解明することで、妄想的観念が臨床においてどのような役割を持つかが分かれば実際に悩める人に対して早期に適応的治療へ繋げられる可能性が導きだせると期待できる。